

気づきたい「笑顔」

神奈川県 横浜市立旭北中学校 3年生の作品

「〇〇菌だ！逃げろ～」一人の子に向かって言い、走り出すみんな。それが、小学二年の頃のある日に始まった。私もみんなが言っていたし、言われている子も笑って「やめてよ～」と冗談混じりに言っているように聞こえたから一緒になって言った。

それが始まって数日が経った朝、先生が

「〇〇さんを菌扱いした人は自分から名乗り出て。」

と、言った。すごく怒っている様子だった。その瞬間心臓がバクンッと鳴り、教室でヒソヒソと話す声が次第に大きくなっていくのを感じた。数分経っても一人として名乗り出ることなく、痺れを切らした先生は一人ずつ名前を言っていた。呼ばれた子は「おい、お前もやってたやろ！」と他の子の名前を言い、徐々に言っていた人が明らかになっていった。

だが、私の名前は呼ばれなかった。ホッとした。だって、みんなと比べて私は一、二回しか言ったことがないから、私は同じにはならない。そうだ、そうに決まっていると思い込もうとしていた時、

「あれ、〇〇もやってたよね？」

自分の名前が呼ばれた。頭からつま先まで冷えきっていくのを感じる。

「え、私？」咄嗟に知らないふりをしてしまった。「あ、そうじゃん。言ってたよね。」という声が聞こえてくる。その声は多分小さくて、他の人には聞こえてなかったかも知れない。しかし、私の脳内にはその言葉が繰り返し聞こえ、嘘をついている苦しさが頭に打ちつけてくるように感じた。

言った人達が先生に怒られた後、その人達からこんな声が上がった。

「なんで俺達が怒られなくちゃいけないの？」「だってあいつ笑ってたじゃんね。」「言われて嫌なら嫌って言えよ。」自分は悪くないと私達は壁を作っていた。そして、私も悪くないんだと勝手に解釈した。先生は、「今日あったこと、自分が何をしてしまったのかをちゃんと親御さんに伝えてください。」と言っていた。けれど、私は悪いことをしていないから話すこともないと自分に言い聞かせ、親には言わなかった。

次の日の朝学活で先生が、「昨日のことをちゃんと親御さんに伝えた人は手を挙げてください。」と言った。次々に挙がる手。みんなが挙げていくのを見て、私は汗が止まらなくなっていった。ここで挙げなければ

私はみんなから白い目で見られる…私は小さく手を挙げた。罪悪感で包まれてその日は一日中気持ちが沈んだ。

私は家に帰ったら自分がしてしまったことを親に伝えなければいけないのだと思った。でも、母にしっかり説明すればきっとそんなに怒られないだろう。大丈夫。そう思い込んで説明した。その途端、母の顔は青ざめていき悲しそうな声でこう言った。「相手は笑うしかできなかつたかもしれないでしょ。笑っていたとしてもその子は傷ついていたと思うよ。」今まで作ってきた壁が壊れたような気がした。母はその言葉を言った後、その子の家にすぐさま電話をして何度も謝っていた。母からの信頼を失ってしまったこと。変なあだ名をつけてからかかってしまったことの罪悪感で吐きそうになった。

私もその子に謝罪することを決意した。謝ることで、その子の心の傷が治るわけでもないし、許されることではないと分かっていた。分かっていたけれど、私は謝ることしかできなかつた。翌朝その子に謝りに行こうとした時、拒絶されるのが怖くて足がすくんだ。でも、私のこの恐怖よりその子はもっと怖かったのだろうと思い出し、勇気を振りしぼって謝罪した。その子は「大丈夫だよ。」と優しい声で言い、私を拒絶なんてしなかつた。その瞬間、全身についていた重りが外されたように感じた。ああ、なんてこの子は優しい人なのだろうと心から思った。

私はこの出来事を一度も忘れたことはない。変なあだ名でからかわれているときのあの子の笑顔。あの笑顔は上辺だけでは分からない気持ちがあったのだと思うと後悔が押しよせてくる。私はこの事があってから、誰か冗談でイジラれていたとしてもその子の顔色や傷ついていないかを見て後から声をかけるようになった。そうするようになってから周りの子達から思いやりがあると言われるようにもなりたくさんの良い友達に囲まれている。

私は、一生の後悔を胸に刻み、二度と同じことはしないし傷ついている人を助けようという気持ちを忘れず、今日を生きていこうと思う。